

CCNJ 設立記念シンポジウム 要約

2013年1月13日（日）13:15～16:00

ヨコハマ創造都市センター（YCC）3階



（文責：編集部、敬称略）

【司会】 ただいまより「創造都市ネットワーク日本」設立記念シンポジウムを開催させていただきます。私は横浜市文化観光局・創造都市推進課長の奥田裕之と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。（拍手）

それでは、開催の挨拶を駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部教授で NPO 法人都市文化創造機構副理事長の川崎賢一様に行っていただきます。

【川崎】 川崎でございます。CCNJ の船出がどういう意味を持っているのか、簡単に評価したいと思います。まず、個人レベルから集合体のレベルに創造性の枠を広げるという意味があります。知識社会をベースにした新しいタイプの制度として、知識や経験を共有化し蓄積していくチャンスになります。それから、もう 1 つ、グローバルなネットワークの基礎になると期待しております。

いま申し上げたフォーマルなことに、私なりの指摘を 2、3 付け加えたいと思います。1 つはグローバルなネットワーク——例えばユネスコのネットワークです——の背景に関係します。私は文化社会学をやっております、グローバリゼーションの研究を 20 年ぐらいやってきております。最初は欧米から入ったのですが、一昨年从去年にかけてシンガポールや上海で研究してきました。そうした意味合いで考えますと、グローバリゼーションはアングロサクソンの、金融資本主義が基本的に支配しているわけですが、その一

方で、もう少しユネスコ以外の集合主義的なネットワークが重要な意味を持ってきます。敵対するわけではなく、一緒にやっていく必要がありますが、CCNJは新しいタイプの集合性を模索するための1つの手段として、大切なものになると思います。

もう1つは、新しい考え方、新しい制度ということをおっしゃるわけですが。文化芸術から見て、ハイカルチャー以外のポピュラーカルチャーとか、ICT系の文化をどういうふうに取り入れていくのかということは重要な問題としてあると思います。例えばポピュラーカルチャーについては日本では長い歴史がありますし、そういうところから掘り起こして、どう共存していくのかを考えていく必要があります。

それからもう1つ、例えば私がやっているシンガポール、あるいは最近ではカタールのようなところはお金がたくさんあって、文化制度を強引に20年ぐらいかけて作っています。それについてはたくさんの批判があることは私も存じていますし、実際、問題があるのは確かです。ただ、日本の場合は過去の文化遺産が豊富ですから、新しく創るということについてももう少しオープンに、学ぶことができるのではないかと感じています。

これから本格的に展開していったら、経済的な波及効果とか政治的な連帯とか、文化的アイデンティティを皆さんがシェアできるような、1つのきっかけになるといいなと考えています。これから記念シンポジウムに入らせていただきます。(拍手)

【司会】 それでは、記念講演に移らせていただきます。はじめに鳥取大学地域学部地域文化学科教授で、都市文化創造機構理事の野田邦弘様より、バーク・テラー様の紹介をいただきます。

【野田】 ご紹介いただきました野田です。簡単に、バーク・テラーさんを紹介いたします。ぜひ創造都市ネットワークカナダ(CCNC)の設立時のことも含めてお話ししたいという趣旨でお呼びしました。私は昨年、佐々木先生や文化庁の方と一緒にカナダに行きましてCCNCにも行きましたし、バンクーバー、トロント、ニューウェストミンスターにも行きました。その概要は、配布物の中にありますので、ご覧いただければと思います。

バーク・テラーさんはバンクーバー市役所の中で文化のお仕事をされていました。CCNCを立ち上げられた中心人物です。今は市役所をお辞めになって、ご自分で会社を営まれるとともに、UBC、ブリティッシュ・コロンビア大学で新しくできましたセンターの所長をなさっていらっしゃいます。

このプログラムのあとに名刺交換の時間を設定しておりますので、関心のある自治体関係者の方をはじめとして、ぜひ直接交流していただければと思います。

【司会】 それでは、バーク・テラー様よりご講演をいただきます。バーク・テラー様、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

記念講演「創造都市ネットワーク・カナダの経験」

バーク・テラー（ブリティッシュ・コロンビア大学）



お招きいただき、ありがとうございます。最初に創造都市ネットワーク日本CCNJの発足を祝福いたします。このように多数の自治体が共通の目標のために協力されることは素晴らしいことです。この重要な日のために、バンクーバー市長、グレゴール・ロバートソンからのお祝いのメッセージを持参いたしました。バンクーバー市は横浜市の姉妹都市でもあり、創造都市ネットワーク・カナダ CCNC が設立された都市でもあります。



私のプレゼンテーションは次の 3 部になります。

- ① CCNC 設立の背景と経緯、
- ② 創造都市に向けた文化プランニング、
- ③ 創造都市ネットワーク・カナダの 10 年における取り組み内容について



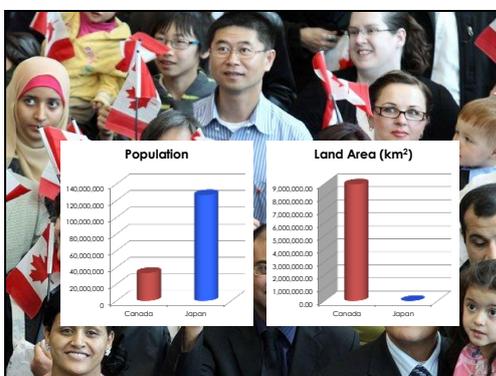
1999 年当時は、文化プランニング、創造都市、文化経済という概念は現在ほど広く理解されていませんでした。カナダは広大な面積に、人口が分散しており、自然資源に依存した経済という特徴があり、日本とは違いがあります。

私は教育や公的サービスなど公共セクターの役割を評価し、スポーツや文化を愛好してきましたし、1960-70 年代の文化がパワーを持っていた時代の申し子でもあります。

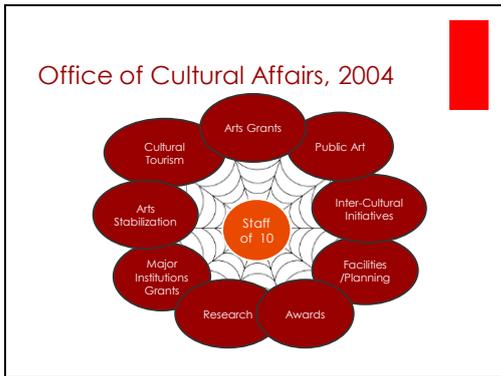
バンクーバー市に勤務する前には私は、カナダ文化評議会、カルガリーオリンピックの文化プログラム、万博のカナダ館などの多様な公共・民間・NPO セクターでの経験を持っています。



退職後は 2010 バンクーバーオリンピック文化・祝典・教育分野の副プロデューサーを務め、ブリティッシュ・コロンビア大学の文化計画と発展研究センターを設立し、所長を務めています。こうした経歴から、私は創造性と文化の力を評価し、経済への貢献や社会変革への役割について理解を深め、持続的なコミュニティ発展に関わってきました。



カナダは面積では世界第 2 位で、日本の 26 倍にもなりますが、人口は 3500 万人で東京圏の人口とほぼ同じでほとんどがアメリカとの国境近くに住んでおり、国土は広く、独自の地理的文化的アイデンティティを持っています。カナダの公用語は英語と仏語の 2 つあり、アボリジニーも居住しており、市民生活面の多文化主義や文化的多様性について 40 年の歴史があります。



私たちは市議会や経験のあるマネジメントチーム、コミュニティの支援を得て、知的理解やコミュニティ・アイデンティティ、文化ツーリズムや創造産業などの新たな政策やプログラムのような広範囲の社会的便益と目標の実現を目指すような創造的アプローチを発展させました。

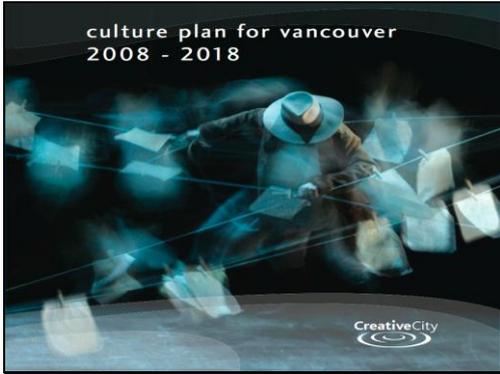


1992年にはチャールズ・ランドリーの本が出るよりも早く「創造都市に向けて」と題する専門部会報告書を市議会に提出しました。そこでは、「に向けて」という言葉で、バンクーバーが目標とする方向性を指示し、また、文化プランニングスタッフのような小さな組織では十分でないことを訴えました。



こうして、包括的な関与が明らかになりました。

- 計画局
- エンジニアリング
- 公園とリクリエーション
- 経済発展
- 社会プランニング
- 住宅
- 消防、財務、
- コミュニケーション
- 市長室
- 警察



このような、広範囲で、部局をまたがった関与の結果、最初の包括的な文化プランが完成し、シュー・ハーヴェイが初代の文化サービス局長に就きました。彼女は現在、テーラー・ハーヴェイ・コンサルタント会社のパートナーです。



1988年—98年の活動について、まとめますと、①芸術発展を超える文化プランニングの方向に向けてコミュニティ発展の視点を活用する。②目標とするビジョンとして「創造都市」を掲げて、バンクーバーをそれに近づける、③文化プランニングと何か？成功のためには何が必要か？より包括的に理解が深まる。

芸術と創造性はほとんど全てのコミュニティにおいて我々が活動する核心部分であり、文化発展のための出発点です。



実際、現在では文化は社会的、経済的、環境的持続可能性の3領域にとって要として広く認識されており、創造的文化的視点をコミュニティの利益とその住民やセクターとの領域全体に拡張する必要があります。



バンクーバーの芸術文化発展への最大の挑戦の1つは、22自治体が集成的な福祉の責任を共有するグレート・バンクーバーというシステムです。バンクーバー市は最大の自治体であり、芸術文化施設が最高度に集積していますが、22のうちの1つにすぎません。幸いなことに共同の戦略や全地域的文化プランニングへの合意が生まれ、互いの経験が各自自治体の能力を引き上げ、文化プランニングと発展活動が前進しました。

What we Learned

- Significant difference in:
 - Levels of knowledge and expertise
 - Access to information
 - Resources
 - Basic Capacity
- Working together we could:
 - Share knowledge and expertise
 - Support each other
 - Create regional partnerships
 - Enhance cultural planning and services in the region
 - Strengthen the regional economy



ここから、我々が学んだことは、以下の点で自治体間の大きな違いがあること。

- 知識と経験のレベル、
- 情報へのアクセス、
- 資源、
- 基礎的能力

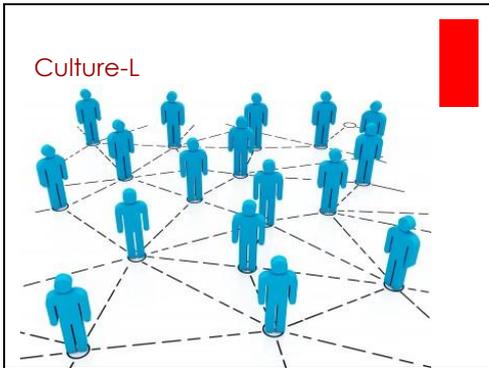
協働すれば、以下のことが可能になります。

- 知識と経験を分かち合う、
- 互いに支えあう、
- 地域のパートナーを作る、
- 地域の文化プランニングとサービスを強化すること、
- 地域経済を強めること



Creative City Network

まさに 90 年代後半に、ワールドワイド・ウェブ技術が急速に発達し、オンラインで情報交換することができて、ネットワーク化することができるということを、我々は知りました、そして、私がバンクーバー市で「Culture-L」と呼ばれる「リストサーブ」を開始した直後に、自治体間の会話が本格的に始まりました。



Culture-L のメンバーシップを構築し、ニーズを定め、目的をセットし、サービスを組織し、オンライン出版物を始めるのにおよそもう 2 年かかりました。また、創立会議を招集するための資金調達と、創造都市ネットワーク・カナダの設立を正式のものにするためにも、長い時間を要しました。

Mandate

- "The Creative City Network of Canada is a national non-profit organization that operates as a **knowledge sharing, research, public education, and professional development resource** in the field of local cultural policy, planning and practice.
- Through its work, the Creative City Network of Canada helps **build the capacity of local cultural planning professionals - and by extension local governments** - to nurture and support cultural development in their communities."

CCNC の公式的権限は、以下のとおりです
創造都市ネットワーク・カナダは、地方の文化政策、文化プランニングと実践の分野の知識共有、研究、公教育と専門職の発展資源として動く全国非営利団体です。

その活動を通して、CCNC は地元の文化プランニング専門職の能力構築を助けます—そして、自治体の拡張によって—彼らのコミュニティの文化的発展を支援します。

SERVICES:

- Policy & Program Library
- Research & Publications
- Regional Networking
- Annual National Conferences
- E-news, Twitter, Facebook
- www.creativecity.ca

CCNC が提供する一連のサービスは以下です。

- 政策とプログラムに関する図書館
- 研究と出版
- 地域的ネットワーキング
- 全国規模の年次大会
- メールニュース、ツイッター、フェイスブックなど
- www.creativecity.ca



CCNC は、都市自体間の関係に加えて、地方自治体の文化的発展スタッフのための実践コミュニティ、すなわちピア・ツー・ピア関係を共有し、同様の責任、挑戦とツールをもつ専門家のネットワークであるように設計されていました。

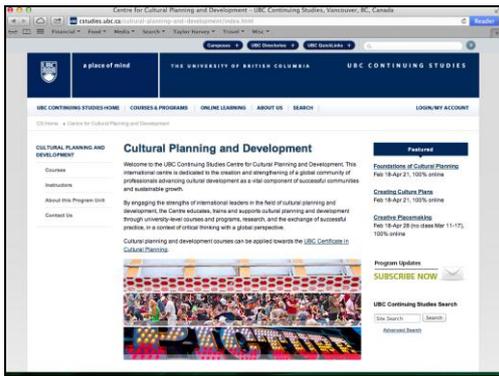


ユネスコ創造都市ネットワークも重要な情報と知識交換に従事しますが、それは実践コミュニティとして動きません。彼らのプログラムの重要な焦点は、創造産業の1分野で、たとえば文学都市または音楽都市、映画都市であるとその成果を宣言することを会員都市に要求します。これはいくつかの分野でマーケティングの優位性を提供するかもしれないが、ほとんどのカナダの文化プランナーが彼らのコミュニティのために抱く総合的な創造都市の目標を反映することも宣言することはありません。



CCNC が独立非営利組織として設立された2つの鍵となる理由がありました。第1は、文化プランニングの概念と創造都市戦略が公式的な自治体関係の基礎であるために充分には開発されてなかったからです。いくつかの都市にゆだねるのは、あまりにも早すぎたのです。

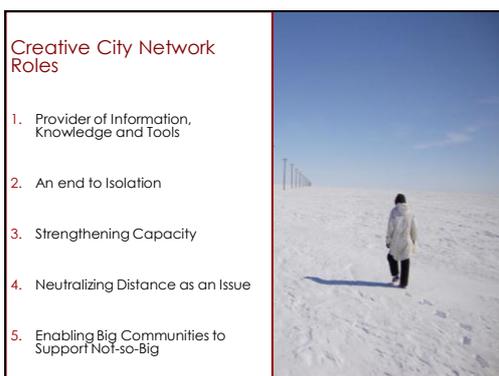
第2の理由は、我々が最初に実践コミュニティを次いで自治体間の組織を構築したからです。それこそ我々が最も必要としたもので、非営利の社会は目的のために最高の乗り物でした。



CCNCの中心的なスタッフ・チームは2人です。CCNCは実践コミュニティであり、会員は要求されるサービスの多くをボランティアの原則で、自らが満たすという大きな価値を提供します。そして、主要な会議とイニシアティブのための契約スタッフを置きます



理事会は、年次大会で会員から選ばれます。理事会には、あらゆる地域（全ての行政区ではありませんが）から代表が選出されます。理事会は、大・中・小規模のコミュニティのバランスをとるように選ばれます。執行部は、日常のプログラミングと会議、地域のサミット、研究のイニシアティブ、会員拡大と基金調達などの活動の組織化に深くかかわります。



CCNCの役割は以下のものです。

- 1 情報、知識、ツールを提供する
- 2 孤立を終わらせる
- 3 能力を高める
- 4 地理的距離を無効にする
- 5 大きなコミュニティに、大きくないコミュニティを支援するように働きかける

Creative City Network Roles

6. A Principled Partnership
7. Forum for Celebration
8. Enables Big Savings
9. Values the individual public servant
10. Community of Practice



CCNC の役割は以下のものです。

- 6 理にかなった協力
- 7 祝賀と評価のためのフォーラム
- 8 大きなコストと時間の節約を可能にする
- 9 個々の公務員の価値/重要性を認める
- 10 実践コミュニティの CCNC 集会を招集する

National Conferences



全国的な会議はカナダの各地で開催されてきました。

Government support

- Project staff
- Conference organization
- Travel subsidies
- French/English translation
- Specialized software development for the resource library, and
- Core publications



カナダ政府の支援には以下のものがあります。

- プロジェクト・スタッフ
- 会議組織、
- 旅行助成金、
- 仏語/英語の通訳、
- 資源図書館のための専門ソフトウェア開発
- 中心的な出版物



2002年に設立会議で創造都市ネットワーク・カナダを正式に立ち上げた時には、我々にはおよそ70-80の加盟自治体がありました。そして、2004年以降、CCNCはおよそ125-135の自治体会員を維持してきました。



このような経験から、我々は時間を超越するようなアフリカの諺から教訓を深く学びました。

「あなたが速く行きたいならば、
一人で行きなさい。
あなたが成功したいならば、
一緒に行きなさい。」



我々の社会的、文化的、経済的景観の中で公共善に向けた変革を生み出す大きな機会は多くの人に与えられてはいません。

それゆえ、創造都市ネットワーク日本を通して、
- あなた方の地域のコミュニティで、そして、
相互のまた全国的な関係で- あなた方の肩に大きな責任がかかっているのです。

あなた方が現在までに成し遂げたことを祝福します。私は、将来、あなた方が一緒になって、より多くのことを達成することができるものと期待しています



今日はこのような考えをあなた方と共有する機会をいただき感謝しています。ありがとうございました。

【司会】 バーク・テラー様、ご講演どうもありがとうございました。会場の皆様、いま一度バーク様に大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

それでは、ここで10分間の休憩をいただきたいと思います。再開は14時35分となりますので、それまでにご着席いただきますようよろしくお願い申し上げます。

(休 憩)

【司会】 それでは、プログラムを再開させていただきます。バーク・テラー様、佐々木雅幸様、野田邦弘様にオープン・ディスカッションをお願いいたします。コーディネーターの佐々木先生、よろしくお願いいたします。

<<<<オープン・ディスカッション>>>>



(文責：編集部、敬称略)

【佐々木】 野田さんと私は CCNC を調べてみようと思ひまして、一昨年の 12 月、ほぼクリスマス休暇にかかっているところに、バンクーバー市役所、トロント市役所、それからバンクーバー周辺の小さな都市を駆け足で回ってきました。野田さん、その印象はどうですか。

【野田】 やはり、パークさんも少しお話になりましたけれども、CCNC が立ち上がるときの状況はけっこう日本と似ているなと思ひました。文化の部署が、自治体の中で必ずしも高くなくて、職員も 1 人だけというところがあつて。

先ほどもおっしゃいましたけれども、インターネットを活用したコミュニケーションがすごく役に立ったという話を聞いて、当時そうだったのだなと実感しました。日本より広いですから、移動するだけでも最大 4 時間半の時差があつたり、民族的にもいろいろな人々がいたりとか、そうしたストレスがある中でバンクーバーの人たちは CCNC を立ち上げた。この意義は非常に大きかつたのではないかと思ひました。

【佐々木】 トロントという都市はクリエイティブ・シティで有名です。皆さん、ご存じだと思いますが、リチャード・フロリダというアメリカ人の学者がいます。彼はもともとピッツバーグにいたのですが、最近トロントに移っております。フロリダさんはトロントの大学に大きな研究所を作って、トロントの研究をしながら、トロント市役所の方と一緒に戦略を作っております。

トロントの創造都市とバンクーバーはだいぶ違うという印象を私は受けました。トロント

トは金融セクターがカナダの中で一番大きく、強くて、世界都市としての競争力をもった「競走型創造都市」と私は呼んでいます。つまり、経済セクターと文化の関係はトロントのほうが強い。それに対してバンクーバーはカルチュラルプランニングをベースにして創造都市論に入った。このカルチュラルプランニングはソーシャルプランニングと一緒に仕事をしてきました。ソーシャルプランニングですから社会問題の解決です。したがって、私はインクルーシブ・クリエイティブシティ、つまり「社会包摂型創造都市」に近いものと直感的に思いました。まだ論文には書いていません。

バークさんのお話のキーポイントの1つは、まず CCNC がカルチュラルプランニングと深い関係にある。その担い手はカルチュラルプランナーである。カルチュラルプランナーというのはきちんとしたタイトル（資格、身分）があって、フィジカルプランを立てるアーバンプランニングの人たちとも一緒に議論をしていて、あるいはソーシャルプランニングの人たちとも議論をして、包括的な広い視野を持って文化政策をやっているということです。狭い芸術文化の支援だけをしている、お金を出すということではない。

したがって、バンクーバーの場合、創造都市という概念はカルチュラルプランニングからきているということによろしいですね。

【バーク】 そうです。ソーシャルプランニングは幅広い視野で都市が抱える問題を把握して、実践的な計画づくりをしていますので、カルチュラルプランナーも彼らと一緒に仕事をする中で文化と創造性を都市全体に押し広げる創造都市政策にまで展開してきたのです。

【佐々木】 もう1つ私が印象深く思ったのは、日本にはカルチュラルプランナーというものが育っているか、あるいはそういう職種があるかということですが、どうですか、野田さん、横浜市でそういう方はおられましたか。

【野田】 日本では文化計画という言葉自体がないと思います。そう言うと、演劇を行政がつくる計画みたいな意味になるというので、使われないと思います。文化計画というのは非常に根本的な次元での概念で、文化担当部署だけではなくて、すべての部署にかかわるキー概念であるということバンクーバーに行ったときに感じました。

【佐々木】 英語のプランニングという概念は、プランナーがあるのでプランニングがあると思うのです。プランとかプログラムとか、あるいはポリシーとも違うのです。たぶん、アーバンカルチュラルプランニングという言い方もありますが、カルチュラルアーバンプランニングかもしれませんし、カルチュラルソーシャルプランニングかもしれないというふうに私は聞いております。バークさん、笑っているけれども。

【バーク】 全くその通りですね。カルチュラルプランナーとアーバンプランナーが協力して創造都市政策を立て、実践するのです。

【佐々木】 日本の自治体では、カルチュラルプランニングにしる、カルチュラルプランにしる、専門家をつくらない。ゼネラリストで2年から3年で次々交代していきますので、蓄積が乏しいのです。それに比べるとカナダの場合は、カルチュラルプランナーがいてカルチュラルプランニングをしますから、カルチュラルプランナーの人たちのネットワークをつくることによって、その知識はさらに広がります。

日本に同じシステムは導入できない。しかし、この機能を持ったネットワークを作ることにはできると思います。創造都市という政策目標を持っている自治体があり、市長さんや町長さんたちがすでにおられます。ですから、プランナーの実践コミュニティではなくて、もう少し広いネットワークを作って、その中でカルチュラルプランに関する情報を蓄積していったらどうかと考えました。それで基本的構成は基礎自治体としました。

そして、日本で創造都市の実践をしているのはアート NPO のメンバーであり、アーティストやコミュニティアーティストやコミュニティデザイナーである。この人たちもコミュニティ・オブ・プラクティスとして入ってもらえないかと考えたので、自治体以外の団体、経済団体、NPO の方々、さらに個人も構成員にしていく。このように CCNC をモデルにしながらか CNJ の概念、考え方を構想した次第です。

【バーク】 CCNJ のアプローチはよく分かりました。CCNC の目的はカルチュラルプランニングを通じて自治体のキャパシティビルディングを目指しています。

【佐々木】 キャパシティビルディング、能力を構築していくというのはカルチュラルプランナーだけではなくて、まさにコミュニティ全体の能力を上げていくということですね。これはすばらしいですね。

最後のスライドの鳥の飛び方ですね。雁行型発展と言いますが、なぜあんな形をするかということは皆さんご存じでしょう。先頭の鳥は大変強い風や空気の抵抗を受けますので、ずっと先頭を飛び続けることはできません。しかし、横の鳥は最初の鳥が切り開いた気流をうまく使いますので楽に飛んでいけます。ですから、必ず交代して飛びます。そして、まだ若い鳥は後ろのほうで本当に楽に飛べるのです。速く1人でいくのではなく、編隊を組んで遠くまで行く。リーダーは時々疲れますので、横浜も疲れますよね。金沢も神戸も疲れます。だから、交代するのです。交代してリーダーシップをとる。これがすばらしいメッセージなのです。どうですかね。

【バーク】 全くその通りですね。

【佐々木】 だいぶイメージが共有できたと思います。このあたりからフロアからの質問タイムにしたいと思います。どなたでも自由にご意見、ご感想、質問をお願いします。

【中山】 まだ疲れていない横浜市でございます。(笑)

最後の雁が飛んで行くアメリカのことわざもすごく印象的だったのですが、遠くに行く、それも一緒に行くということがよくわかったのですが、いま CCNC でめざしている遠くとはどういう遠くなのかということをしりたいなと思いました。もし何かイメージがあるのであれば教えていただければと思います。

【バーク】 現在、私は CCNC の代表ではないのですが、CCNC はカルチュラルプランニングを通じて創造都市政策を推進する担い手の実践コミュニティとして、引き続き、大きな役割を果たすでしょうし、各種のプロジェクトを通じて市民をエンパワーメントすることにより、全カナダ規模での創造都市の実現に貢献するものと期待しています。

【佐々木】 長官、どうぞ。

【近藤】 カナダにおけるカルチュラルプランナーの活躍については素晴らしいと思うが、文化芸術が果たす役割について、どのように説得的に説明できるのか、常々考えてきた。特に、戦後の経済成長の中で物質主義、量的成果を追求しがちな政策に対して、精神的な充足や生活の質の向上など、文化が果たす多面的な役割をどのように広く認識させてゆくか、いかにしてマインドセットを転換させるのか考えているところがあれば、お聞きしたい。

【バーク】 よく分かります。ジェーンジェイコブズが述べたように、大規模な都市開発の時代ではなくなり、創造的な雰囲気や、インプロビゼーションがおこる場を都市の中に広げ、創造的なアイデアで新産業をお越し、眠っている資源に光を当て、多面的な効果を引き出すことが大切になっています。創造都市政策はその点で物質主義のマインドセットを転換させる力があると思います。

【佐々木】 実はきのう横浜市が主催したアジア創造都市国際シンポジウムで、京都造形大学の椿昇さんが非常に面白い話をされました。引きこもりに近いような学生たちが、授業のあとにアート作品で夜も寝ないで頑張り、就職率が上がってしまうぐらい元気になると言うのです。例えば、瀬戸内国際芸術祭で小豆島のまちおこしのプロジェクトを椿さん

がやって、そこに学生たちもボランティアで参加する。地域の再生と自分自身の再生です。

アートが持っている効果を広い目で見ると、犯罪防止であったり、失業防止であったり、社会保障経費が減ったり、ソーシャルコストが減るわけです。したがって、芸術文化によるコミュニティ再生、あるいは青少年の再生といった事例を集めて、それを世界的に共有するというのが私たちの夢で、ぜひやりたいと思います。

ほかに、まったく違うことでもどうぞ。

【吉本】 ニッセイ基礎研究所の吉本といいます。バークさん、きょうはすばらしい、たいへん勉強になる話をありがとうございました。日本ではいまアーツカウンシルという文化政策を実践する組織をつくる動きが広がっていきまして、国レベルでは近藤長官のイニシアティブで具体的に動いていますし、東京都、沖縄県、ここ横浜市もアーツコミッション・ヨコハマという名前で、実質的なアーツカウンシルができています。カナダの場合には国にはアーツカウンシルがあると思います。それから、州もおそらくあると思いますが、市にもアーツカウンシルがあって、その実践者と、計画者と、政策を作る人と、アーツカウンシルと、いろいろな組織や立場が違って、それが分かれていくのがいいのか。でも、役割が分かると、トータルにわかる人も重要になってくるのではないかと思うのですが、そのあたりぜひカナダのご経験をお聞かせいただきたいのですが、いかがでしょうか。

【バーク】 カナダでは連邦政府、州政府、自治体の 3 つのレベルでアーツカウンシルがあり、カルチュラルプランニングのセクションを含めると、多様なアクターが文化政策に関わっていますので、時には食い違いも出てきますが、民主主義のプロセスという点ではそれも必要なことではないかと思います。

【佐々木】 時間もだんだん迫ってきたので、発言は遠慮なくどうぞ。

【フロア発言者】 日本とカナダ、横浜とバンクーバーのそれぞれの創造都市の取り組みに興味深く聞きました。日本では東日本大震災が起り、大きな被害が出ましたが、災害に対してアートやカルチャーはどのような貢献ができると考えますか？

【佐々木】 創造的問題解決ということですね。これまでと違う新しい問題解決能力が行政にしる、企業にしる、今求められている。日本のように歴史的に稀な大きな災害があったときに、その数百年に 1 回しか起きない頻度の巨大な災害にコンクリートの壁を大きく高くすることによって備えるのか。そうではない方向で解決するのか。いま日本社会はそういう問題に直面しています。こういうことはたぶんカルチュラルプランニングの領域に入ってくるのではないかと思ったりもします。

いろいろな対話を楽しんでおりますが、野田さん、何か。

【野田】 いま佐々木先生が問題解決ということを言われて、いわゆるカルチュラルプランニングの考え方やクリエイティブ・シティという考え方は、アートのクリエイティビティを活用して社会問題を解決するのだと短絡的に考えてしまいがちですが、もう少し大きな中身でとらえたほうが良いと思います。

行政という組織は極めて近代のシステムです。全部縦割りになっています。道路とか下水とか。文化というのは横にかぶっているものなのに、縦にしたところで問題が発生したのです。具体的に言いますと、日本にはこの30年ぐらいで数千の公立の文化施設ができました。その多くが閉っていたり、閉っていなくてもあまり使われていないと批判されました。文化を縦割りにした結果です。

一方で、昨日パークさんを案内した BankART みたいな、減価償却が終わった歴史的な建物で、NPO が入って自由に使っていく中から、例えば震災とアートというプロジェクトが生まれました。縦割りでなく、文化と都市計画の融合です。運営もパークさんがおっしゃった、1人で考えるのではなく、みんなで議論して、みんなで決めるというやり方です。(最初からの) 結論はないのです。

一般化して言うと、行政が場所であるとか仕組みづくりみたいなものをきっちりやった後は、しっかりした民間に任せてしまう方向になるのではないかと思います。そこはもう度量の大きさもあるのですが、そのへんがないとますます複雑化する社会問題を絶対に解決できません。全部の部局、いくつもの部局にかかわるような問題ばかりですから。創造都市的な考え方でやっていかなければいけないのではないかと思います。

【パーク】 カルチュラルプランニングとは、単なるプランの策定で終わるのではなく、たえず、市民の参加を得て計画作りのプロセスを重視するということであり、その点で創造性が必要になると思います。

【佐々木】 カルチュラルプランニングがより明確になってきたと思います。まさにクリエイティブ・シティもプロセスで考えたいというのが私の発言です。

スー・ハーベイさん、感想を聞きたいと思います。いままでずっと1人で聞いておられて、日本の CCNJ に対するメッセージが何かございましたらお願いします。

【スー・ハーベイ】 今日、ここに集まった CCNJ の皆さんの志や熱意に同感します。今後も、CCNC も一緒に発展していきましょう。(拍手)

【佐々木】 パークさん、メッセージを。

【バーク】 この度はこのような貴重な機会を与えていただき、まことにありがとうございました。（拍手）

【司会】 バーク様、佐々木様、野田様、本当にありがとうございました。それでは、閉会の挨拶を佐々木先生にお願いします。

【佐々木】 カナダではクリエイティブ・シティの概念を 1992 年ぐらいにしきりに使っておられました。私は 1997 年に『創造都市の経済学』という本を出しました。これはチャールズ・ランドリーとカリチャード・フロリダより前です。つまり、我々はさうとう深い絆で結ばれていると改めて感じました。

私がクリエイティブ・シティという言葉をもっと最初に紹介し始めたときに、ひょっとしたら一過性で、あっという間に消費され尽くされるかもしれないと思ったのですが、予想に反して次々と連鎖反応が起きて、世界中の国々で創造都市シンポジウムがあります。私は「国際ジャーナル CCS」の編集長で、3 年間で 12 冊、12 号出しましたがけれども、世界中からどんどん原稿が集まってくるのです。若い研究者はものすごい勢いでクリエイティブ・シティの論文を書いている。

私は最近リボリューション・オブ・クリエイティビティが必要だと思っています。創造都市ネットワークジャパンが CCNC あるいはユネスコのネットワークと連携しながら社会のボトムアップ型の転換に結びついていけば本当にうれしいなと思っています。いろいろなところで支えていただいた方々に、改めて深くお礼を申し上げます。本日は本当にありがとうございました。（拍手）

【司会】 佐々木先生、ありがとうございました。

これをもちまして本日のプログラムはすべて終了でございます。本日はご来場ありがとうございました。